

研究会報告『リム・ブンケンと海峡華人：歴史的再評価』

篠崎香織（欧亜大学）・戸田賢治（一橋大学大学院）

シンガポールの近代史において政治、経済、文化と多岐にわたる分野で重要な役割を果たしたリム・ブンケン(1869－1957)の逝去 50 周年を記念する諸行事が 2007 年 1 月 24 日から 27 日まで開催された。その開幕は、1901 年にリムが出版した *The Chinese Crisis From Within* の再出版を記念するワン・グンウ教授による講演会であった。さらに、リム・ブンケンの曾孫にあたるステラ・コンはリムの生涯をミュージカルにしているが、その作品の演出であるヴィクトリア調の音楽や歌がライブで披露された。翌 25 日には、リム・ブンケンに縁ある場所をめぐるバスツアーが行われ、個人ではなかなか訪問し難いリム夫妻の眠る墓地にまで案内してくれた。そして、この一連の記念行事を締めくくる『リム・ブンケンと海峡華人：歴史的再評価(Lim Boon Keng and the Straits Chinese: A Historical Appraisal)』と題する研究大会が、シンガポール国立大学（以下 NUS）と国立図書館との共催で、27 日に同図書館で開催された。（戸田）

Philip Holden (NUS)がリム・ブンケンの生涯を紹介したのち、‘Lim Boon Keng & His Times’と題する第 1 セッションが行われた。

Mark Ravinder Frost (Asia Research Institute, NUS) は、“Remaking Singapore: Lim Boon Keng and His Circle”と題した報告を行った。現代のシンガポールでは、文化的伝統の維持と国際性・近代性への対応を課題とし、その方策として例えば二言語教育が行われており、同様の課題と対応がリムの言説に見出せることが指摘されている。これに対して Frost は、リムを特殊な例外的な人物として位置づけるのではなく、20 世紀初頭におけるアジア人知識人の登場と公共圏の発展と、その言動を急進的と捉えた社会との関係の中に位置づけて考えるべきだとした。

Neil Khor（ケンブリッジ大学）は“Multicultural Burlesque: Parodying Modernity in Lim Boon Keng’s Tragedies of Eastern Life”と題した報告を行った。‘Tragedies of Eastern Life’とはリムが著した小説で、1927 年に上海で発行された。Khor はこの小説を、近代的でコスモポリタンなマラヤの架空の都市‘Teratai’に生き長らえる伝統慣習と封建権力の中で、エスニックや階級の違いを越えて恋愛を成就させようとする 4 組のカップルを通じ、近代と伝統の緊張を描いた作品であると紹介した。また本小説とバンサワンの演目（多様なエスニック集団によって構成された大衆演芸集団で、各地を巡業し、寓話、ロマンス、喜劇、社会風刺を主な演目とした）との類似性を指摘した。

Didi Kwartanada (NUS) は“A Nanyang Cosmopolitan: Dr. Lim Boon Keng and the Kaoem Moeda Bangsa Tionghoa in Early Twentieth Century Java”において、リム・ブンケンが果たした役割はシンガポールに留まらず、南洋と中国を結びつけたコスモポリタンであると評価した。それによると、華人としてのアイデンティティと倫理観を維持し、かつ合理性とモダニティを追求したバタヴィアの華人は、1900年以降中華会館を設立し、儒教の復興や華語教育の促進などを行った。リムはこれらに直接かかわったうえ、リムなどが発行していた *Straits Chinese Magazine* は、ジャワの華人によって参照されていたとのことである。

戸田賢治は“Anti-Opium Movement and Straits Chinese Vicarious Nationalism in British Malaya in the Early 20th Century”において、1906年に海峡華人らが中心となって展開したアヘン吸引反対運動を「ナショナリズム」との関連で論じた。それによると、リム・ブンケンら海峡華人の知識人は19世紀末より、シンガポールの華人社会の改革と中国の発展におけるアヘン吸引の弊害を指摘していた。これは日本とアメリカがアヘンの吸引を禁止し、アヘン廃止の機運が国際的に高まりつつある背景下で進展した。その中で、アメリカが1904年に華人排斥法を更新したことを受けて1905年5月に上海でアメリカ製品をボイコットする運動が発生し、同年6月にシンガポールでも同様の運動が発生した。戸田は、これを契機に華人のナショナリズムが覚醒し、華人と中国の生存を希求する意識がアヘン吸引の廃止とアヘン吸引者の救済活動となって現われたとした。ただしこの活動は、アヘンの吸引者であった富裕な商人層の支持を得られず、部分的な成功に留まったという。(篠崎)

第2セッションは、‘Straits Chinese History’というテーマで、「海峡華人」がどのようにイギリスによって近代化するマラヤの植民地社会のなかで政治的・文化的アイデンティティを構築していったのかを考察する発表で構成された。

Chua Ai Lin (NUS) は、“Those for Whom Malaya is Home: Reframing the Straits Chinese as Leaders of the Anglophone, Domiciled Community in Singapore, 1920-1940”と題した報告を行った。従来の研究において「海峡華人」ということばには定まった解釈が存在せず、英語教育を受けイギリスに帰化した富裕エリート層の華人や現地社会に適応したりマレー人と混血したりして形成されたババヤやニョニヤを指したり、さらには単なる海峡植民地生まれの華人を指したりする場合もあり文化的政治的に多岐にわたる。この定義の多義性の問題に対して、‘Anglophone’と‘Domiciled’を必要欠くべからざる要素として抽出し再定義を試みようというのが本報告の趣旨である。Chua は、1914年に発刊された *Malaya Tribune* において、1920年代以降華人社会の枠を超えてインド人など他の移民社会の存在も含めて「マラヤ」という枠組みを積極的に使用する現地化指向を持つ

人々が台頭してきたことに注目し、こうした動向を支えているものが「英語」と「定住」の二要素であると分析している。こうした現地化指向をもった海峡華人の運動や言説はコスモポリタンで普遍的な性格をもっていたと指摘している。

Daniel Goh (NUS) は“Unofficial Contentions: The Postcoloniality of Straits Chinese Representations in the Legislative Council, 1867-1940”と題して報告した。脱植民地化におけるシンガポールの政治の在り方は多人種・多文化主義、または保守から中道型の政治であるとよく指摘されてきたが、こうした特徴の源泉を植民地時代の海峡華人指導者による立法議会での活動や性格のなかに跡付けようとするのである。Goh は、大きく三つの時代区分(1867-1894、1895-1918、1919-1940)に整理しながら、各時期に活躍した代表的な立法議員として具体的に Whampoa, Seah Liang Seah, Tan Jiak Kim, Lim Boon Keng, また Tan Cheng Lock らを取り上げる。特に第二期に活躍したリム・ブンケンを先達の政治家たちの遺産を吸収し結合した政治家として、さらに西洋的価値観をもって植民地的な人種主義を攻撃し広く被植民者の側に立つ「帝國的な多文化主義(imperial multiculturalism)」を構築した存在として、シンガポールの政治的アイデンティティ形成過程の歴史において大きな画期をなしたと分析する。

篠崎香織は“Straits Chinese as Protagonists to Promote the Multi-Ethnic State and Its Reality Outside the Straits Settlements”と題する報告を行った。20世紀というネーションステートの時代の幕開けとともに国民として正式に認知されるのは誰かという問題は頻繁に生じるが、国外においては国内の定義が必ずしも通用せず公権力による保護を十分に受けられないケースがあった。海峡植民地においては現地生まれであれば基本的にイギリス国籍を取得することができ、帰化申請で取得することも可能であった。篠崎は、イギリス国籍を持った海峡華人らが近隣のアジア植民地諸国や中国に行った国外のケースにおいてどうであったかを分析している。中国ではイギリス領事らが海峡華人にイギリス人としての保護を与えなかったり、アメリカのフィリピンや仏領インドシナや蘭領東インドなどではいくら海峡植民地政府が彼らをイギリス国籍者であることを強調しても華人系はすべて中国人と見なされたりした事実を実証的に示した。こうしたあやふやな時代状況こそが海峡華人らの政治的な運動を覚醒させる一原動力となっていたのではないかと分析している。

Seah Bee Leng (NUS) は“Phoenix Without Wings: The Negotiation of Modernity Among Straits Chinese Women in Early 20th Century in Singapore”と題して報告した。伝統と近代の間に揺れる20世紀初頭のシンガポールにおいて、女性への教育の扉は西洋で教育を受けた海峡華人による改革運動のなかで開かれてきたが、それは男性主導の改革運動であった。これに対して女性自らが女性の

権利を主張する動きは、1920-30年代に現われたとし、それをファッションの変化や新聞の投書欄の「自由」をめぐる議論などを事例として明らかにした。これらの試みでは、近代的な妻や母の創出に重点がおかれていたという。(戸田)

最後に Public Lecture として、Lee Guan Kin (ナンヤン工科大学) が“The Boon Keng Pavilion at Xiamen University: History Recovered, Nanyang Link Reconnected”を華語で報告した。リム・ブンケンが厦門大学が創設された 1921年から 16年間、同大学の学長を務めたが、中国ではその功績が忘れ去られていたため、Lee は厦門を中心にリムの歴史的功績を伝える活動を行った。その結果、同大学にリムの功績を讃える記念碑が建てられたとのことであった。(篠崎)

記念行事の一つとして、国立図書館において1月24日から3月18日まで‘Lim Boon Keng: A Life to Remember’と題した展示が行われた。ここでの説明文は、英語のみで表記されていた。また上述の研究大会は、Lee Guan Kin の報告(英語の同時通訳あり)以外全て英語で行われた。こうした状況について華語メディア(『聯合早報』2月2日付など)に、ある統計によるとシンガポールの華人の3割は英語が分からないにもかかわらず、一連の行事が英語に偏りすぎているという批判や、華語学習の提唱や儒教論など中国文化の発展におけるリム・ブンケンの貢献があまり指摘されず、リムのもう半分の側面を理解し損ねたという批判が、シンガポールの華人や中国人留学生から寄せられた。

リム・ブンケンに関するこれまでの研究の多くは、華人性を維持しつつ、「進歩」を体現する欧米文化に対応するために、ブンケンがいかに文化を論じ対処してきたかに着目してきた。これに対して今回の学会は、シンガポールやマラヤ、およびその周辺地域における秩序の構築において、ブンケンの思想や発想が何をもたらしたか引き継がれたかを評価することに重きを置いており、その点において新たな試みであったと言える。

他方で、何語でその評価をするかという問題は、いかなる学会においても起こりうる問題であるように思われた。ある地域を事例とした研究の成果を、その地域の住民に還元すべく、住民の言語で発信することは望ましい。それと同時に、その地域の住民の生き方に普遍的な価値を見出し、研究成果を世界的に発信することで、その価値を人類で共有するという考えもある。そのための言語として、現在の世界で最も有効なのは英語であろう。研究の成果を複数言語で発表すれば問題はある程度解決するものと思われるが、諸事情によりそれが困難な場合も多い。誰に向かってどのような意図で何語で発信するかを説明することの重要性を、改めて認識させられた会議であった。(篠崎)